

① 次の各文の——をつけた漢字の読みがなを書け。

- (1) 室内の装飾に工夫を凝らす。
 (2) 車窓から穏やかな春の海が見える。
 (3) 先生に勧められて、卒業文集を作る。
 (4) 美しい溪谷を眺めながら、川を舟で下る。
 (5) 根拠を明らかにして、分かりやすく説明する。

② 次の各文の——をつけたかたかなの部分に当たる漢字を楷書かひしよで書け。

- (1) 公園でシタしい友人と語り合あう。
 (2) 文化祭の案内状を地域の人々にクくバる。
 (3) 洗い終わった食器をセイケツなふきんでふく。
 (4) 地下鉄の開通で、通勤時間がタンシユクされる。
 (5) 交響楽団のすばらしいエンソウに大きな拍手が起おこる。

③ 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

「ぼく」は、釣りに行った帰りに、町を見下ろすセッコウと呼ばれる丘を下りかけたところで、リヤカーを引いて急坂を上ってくる老人と出会い、あと押しをすることにした。

「ようし、行くぞ。」

老人はそう掛け声を出し、リヤカーを引いた。ぼくはうしろから力いっぱい押した。

リヤカーのなかで、商品の金物がちやちやと鳴った。

「坊やいくつだい?」

老人が風埃かざぼこりから顔をそむけて言った。

「八歳。」

ぼくは答えた。

「今日はお使いの帰りかい?」

「山の堰せきに、鯉釣りに行った帰り。」

老人はリヤカーを引きながらあれこれと話し掛けた。

「釣れたかい?」

「一匹も。」

「釣れなかったんだな。」

「はい。」

「餌えさはなんだい? ミミズか?」

「いえ、うどん粉ときな粉を練ったの。」

「それだけかい?」

「はい。」

「それじゃ駄目だ。味噌みそも混ぜなくちゃな。うーんと匂においの強い味噌も混ぜてな。うどん粉と、きな粉と味噌、それにホーレン草の葉

も一枚くらい刻み込むといいな。よく練るんだ。」

「そうすると釣れますか?」

「そりや、入れ喰いれくいさ。」

「おじさん、どうしてそんなこと知ってるの?」

ぼくがそう言った時、老人は突然リヤカーを止めて振り返った。

頭かぶの上で、吊つるされたセルロイドの天狗てんぐの面がじつとぼくを睨にらんだ。

(1) 「そりや、わし博士だからな。」

老人は自分は博士だと言った。

「博士だからな。なんだって発明できるのさ。魚の餌えさだって、鳥の

餌えさだってな。」

老人はまたリヤカーを引きはじめ、しばらく一人で喋しゃべりつづけた。

ぼくは黙もくってリヤカーを押した。身体が熱くなり、額ぬかに汗がうかん

だ。右手で汗をぬぐった。今度は老人がおしえてくれた魚の餌を作
ってみようとはんやりおもった。餌の作り方は自分だけの秘密にし
たかったが、それでいて誰かに話したい気持ちもあった。銀色の鱗
を光らせたドイツ鯉がうかんた。

あたりが暗く感じた。もうすっかり陽は落ちていいる。老人はいつ
の間にか無口になっていた。それは時折り大人から感じる怖さでも
あった。風がまたうなりをあげて吹いた。

前方の遠くにちらちらと灯りがゆれて見えた。隣町の港の灯りだ
った。急に心細さがこみ上げた。帰ると言いたかったがなかなか言
い出せなかった。(2) 何度もそれを言おうとしたが言えないままりヤ
カーを押しつづけた。自分の町がずっと遠くの方へ去ってしまうよ
うにおもえた。

「おじさん！」

ぼくは勇気を出して大声で老人を呼んだ。老人がリヤカーを止め
た。

「おじさん、帰るよ。」

ぼくは半べそをかきそうになっていた。

「いやいや、坊や、すまなかつた、すまなかつた。助かつたよ。ほ
んとにありがとさんよ。」

老人はリヤカーの引き手のなかから出てきて言った。ぼくは釣り
竿と罎のに入ったバケツを持って立ち去ろうとした。

「坊や、ちよつと待ちな。」

(3) 老人に呼び止められてぼくはぎくりとした。

「坊や、お札というほどじゃないけど、おじさんの気持ちだ。なつ、
これ持っててくれ。」

老人はリヤカーに吊りさげであるセルロイドの天狗の面をとって
ぼくの首にかけた。それからちよつと傷ものだがと言ひ、黄色いプ
ラスチック製の双眼鏡を肩にかけてくれた。こんな時、ぼくはどう

いうわけか不機嫌な顔をしてしまふ癖がある。そんな顔のまま頭を
下げ、その場をはなれた。

「気をつけて帰んなさいよ。」

老人の声がうしろから聞こえた。

(4) あたりはすっかり暗くなっていた。風の音だけが闇のなかで鳴
った。夢中で走った。運動靴の音がぼくを追いかけた。

セッコウまでもどつた時、町の灯りが見えた。臉が熱くなった。
雑貨商の老人にもらった双眼鏡を手に取った。黄色いプラスチック
の部分に地図で見る細い川のような割れ目がある。老人が傷ものだ
と言ったのはその割れ目のことだろう。海に向かい双眼鏡を目にあ
てた。ゆっくりとピントを合わせた。

暗い夜の海で、水平線は見つからなかつた。突然レンズのなかで
小さな光がゆれた。それは金平糖のような光の粒だった。漁火がゆ
れていた。(5) 双眼鏡を町の方へと向けた。一瞬ピントが崩れ、レン
ズのなか水飴のように濡れて見えた。

(安西水丸「黄色い双眼鏡」による)

〔注〕 堰——水の流れを調節するための仕切り。

入れ喰い——釣り針を下ろすと、すぐに魚がかかること。

〔問一〕 (1) 「そりや、わし博士だからな。」老人は自分は博士だと言
った。とあるが、この表現から読み取れる老人の様子として最も
適切なのは、次のうちではどれか。

ア 餌の作り方の話に「ぼく」が引き込まれているのを知り、気
をよくして得意がっている様子。

イ 餌作りの方法についての「ぼく」の質問に答えられず、強が
りを言ってみえをはっている様子。

ウ 発明した餌が実用的でないのを「ぼく」に見破られ、ごまか
そうとして威張ってみせている様子。

エ 餌作りの秘密を教えても「ぼく」が興味を示さないので、冗

談を言って関心を引こうとしている様子。

〔問2〕 (2) 何度もそれを言おうとしたが言えないままりヤカーを押しつづけた。とあるが、この表現から読み取れる「ぼく」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 自分の町から歩きどおしで疲れているのに、元気に歩き続ける老人に休んでほしいと頼みにくくて、やり切れなさを覚えている。

イ 隣町までの道のりを考えて先を急ぎたいのに、急坂をあえぎながら上る老人を促すことができなくて、もどかしさを覚えている。

ウ 自分の町からますます遠ざかるのに、黙々とリヤカーを引く老人に帰りたいことをなかなか切り出せなくて、あせりを覚えている。

エ 隣町が見える所に着いたことを知らせたいのに、黙りこくっている老人が怖くて言葉をかけられない自分に、情けなさを覚えていてる。

〔問3〕 (3) 老人に呼び止められてぼくはぎくりとした。とあるが、「ぼく」が「ぎくりとした」わけとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア やつと戻れると思ったところに不意に声をかけられ、帰れなくなってしまうのではないかと不安になったから。

イ さりげなく帰ろうとしたのに再び話しかけられ、べそをかいたことをからかわれるのではないかと困惑したから。

ウ 歩き始めたところに強い調子で声をかけられ、別れのあいさつをしなかったのをしかられるのかと胸騒ぎがしたから。

エ 天狗の面が欲しいと思っていると突然話しかけられ、お礼を当て込んでいたのを見透かされたのかときまり悪かったから。

〔問4〕 (4) あたりはすっかり暗くなっていた。風の音だけが闇のな

かで鳴った。夢中で走った。運動靴の音がぼくを追いかけた。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 強い風を受けて次第に速さを増しながら力強く走る「ぼく」の様子を、説明的に表現している。

イ 老人を一人残した後ろめたさを振り切るように走り続ける「ぼく」の様子を、象徴的に表現している。

ウ 音にせきたたえられるように心細い思いで夜道を急ぐ「ぼく」の様子を、印象的に表現している。

エ 手伝いの仕事を成し遂げた充実感から誇らしげに家路を急ぐ「ぼく」の様子を、躍動的に表現している。

〔問5〕 (5) 双眼鏡を町の方へと向けた。一瞬ピントが崩れ、レンズのなか水飴すいあめのように濡れて見えた。とあるが、このときの「ぼく」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 双眼鏡を使ってみても確認できないほどに自分の町が遠いことを知り、落胆して深い悲しみを覚えている。

イ ようやく近くまでたどり着いた自分の町に双眼鏡を向けながら、心の中に強く込み上げる喜びを覚えている。

ウ 海の景色を見ようとしているのに、寂しさからつい双眼鏡を町に向けてしまう自分にふがいなさを覚えている。

エ いくらのぞいても町の情景が見えないので、ピントの合わない双眼鏡をくれた老人にうらめしさを覚えている。

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

地球の温暖化問題は、地球環境における最重要問題であり、世界のエネルギー政策、環境政策に重大な影響を及ぼす課題である。しかし、その問題の大きさに対して、温暖化の原因の総合的・科学的な解明はあまり進んでいないのが現状だ。(第一段)

(1) 温暖化の大きな要因ではあるが、二酸化炭素による影響がテレビ・新聞等のマスコミによりあまりに大きくクローズアップされ、二酸化炭素だけの対策が独り歩きしている感じがいじめない。これまで、多くの研究者により、大気中の二酸化炭素濃度が現在の二倍となった場合の地球表面温度の上昇のシミュレーションがスーパーコンピュータを駆使して行われてきた。その計算結果は一〇五度Cの気温上昇と大きな幅をもち、シミュレーションモデル自身にも不確定な要素を含んでいる。(第二段)

そして、現在においても、海洋・森林等による二酸化炭素の回収・固定能力は未知数であり、二酸化炭素の放出量の増加がそのまま大気中の二酸化炭素濃度の増加になるとは限らないことが分かっている。また、温暖化の原因は、二酸化炭素だけでなく、大気中のメタン、亜酸化窒素、クロロフルオロカーボン(フロン)等があり、これらの温室効果気体の影響も無視することはできない。(第三段)

その一方で九一年六月のフィリピン・ピナツボ火山の噴火のように、大気上層に多量の粉塵が放出された場合、微小な粒子が太陽放射光を散乱し温暖化現象とは逆に地球表面の気温を低下させることが考えられている。大規模な火山噴火とその後の気温の低下については過去の歴史からも裏付けられている。気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の九〇年の報告では、大気中の二酸化炭素濃度が現在の二倍となった場合、地表面での平均気温が一・五〜四・五度C上昇することを予測した。しかし、九〇年当時は温室効果ガスの影響のみを考慮し大気中の粉塵の影響は考慮されていない。そこで、九五年の報告では大気中微小粒子による太陽放射光の散乱の影響を考慮して気温上昇を〇・五度C下方修正した。(第四段)

このように、地球の温暖化はさまざまな要因が複雑に関係しており科学的にも不確実な点が多く、二酸化炭素のみを温暖化の原因と断定し、二酸化炭素の対策だけで地球の温暖化問題が解決されると

考えるのは早計である。地球の温暖化問題は、産業革命以後、絶妙にコントロールされた地球環境システムを人間が破壊し始めたことに端を発する。(2)そして、科学技術の進歩により人間が地球環境を簡単に制御できると考えるのは注意すべきことである。(第五段)

科学技術は、これまで個別の限られた領域においては大きな成果を得ることができた。今日のコンピュータ、マルチメディアの分野の発展にしても一つの単一の系であるところが大きい。ところが、地球環境は実際にはあまりにも複雑な系である。「木を見て森を見ず」の例えのように、一つのミクロの分野の理解だけでは地球環境の実態をとらえることはできない。マクロとしての全体のシステムの探求がより重要なのだ。したがって、化学、物理、生物、地球科学、気象をはじめとして、経済、社会、政治、思想・教育等の社会科学の分野も含めた総合科学的な観点から地球の温暖化問題をとらえるべきなのである。(第六段)

むろん、各分野の専門家をただ集めればこと足れりということではなく、各分野の枠を超えた学際的な研究の融合が必要となる。当然、そうした認識をもつ人材の養成が二十一世紀に向けた地球環境問題の解決に急務と言える。(第七段)

七〇年代にローマ・クラブの著名なりポート「成長の限界」が出版され、将来の石油資源の枯渇を予想して石油消費に依存した文明への警告がなされた。二十数年後の現在、石油資源は枯渇することではなく、ある意味ではこの予測は外れた結果となった。これは、七〇年代初めのオイル・ショックを経て、先進諸国においては、省エネルギーの生産システムへの転換が進んだこと、また、石油の探掘技術の進歩により新たな油田の開発が行われたためである。このように、地球環境問題は人間社会の上に成り立つものであって、その将来の動向を科学的観点のみから予測することは困難なのである。

(第八段)

加えて補足している。

イ 第六段で述べた内容に基づいて、第七段ではそれを順序よく整理して分析している。

ウ 第六段で述べた内容に基づいて、第七段ではそのあらましを示して分かりやすく解説している。

エ 第六段で述べた内容に対して、第七段では反対の内容を具体的に示して話題の転換を図っている。

〔問4〕 この文章の中で述べられている筆者の考えと合っているものは、次のうちではどれか。

ア 大気中の二酸化炭素の大部分は海洋・森林等により回収・固定されてしまうので、温暖化の要因として考慮する必要はない。

イ 火山噴火による多量の粉塵が地球表面の気温を上昇させるため、人間の英知によっても温暖化を食い止めることは不可能である。

ウ 石油資源枯渇の予想が文明への警告となり得たように、地球環境問題の動向は科学的観点から十分に予測できるはずである。

エ 温暖化問題を冷静に受け止めて最悪のシナリオを回避するためには、英知を集めてあきらめることなく努力を重ねていくべきである。

〔問5〕 この文章は、昨年の六月五日の「環境の日」に、ある新聞に掲載されたものである。「地球環境を守るために私たちができること」という題で、あなたの意見を二百字以内にまとめて書け。なお、題は書かないこととし、書き出しや改行の際の空欄、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

5 次のAは「おくのほそ道」の鑑賞文、BはAに引用されている「おくのほそ道」の原文の現代語訳である。二つの文章を読んで、あとの各問に答えよ。

A 「おくのほそ道」の中で、ふたたびその地をたどりたいと思うところは多いが、羽黒・月山・湯殿山もその一つだ。(1) 月山から湯殿に芭蕉がおりた時に、五分咲きの桜に出会っている。

岩に腰かけてしばしやすらふほど、三尺ばかりなる桜のつぼみ半ばひらけるあり。ふり積む雪の下に埋もれて、春を忘れぬ遅桜の花の心わりなし。

炎天の梅花(2) 爰にかをるがごとし。行尊僧正の歌のあはれも爰に思ひ出でて、(3) 猶まさりて覚ゆ。(「おくのほそ道」)

行尊の歌は、吉野大峰山中で苦しい修行をしている時、思いがけず旧暦五月に山桜がしんと咲いているのを見て歌った、「金葉和歌集」のあの歌

(4) もろともにあはれと思へ山桜花よりほかにしる人もなしである。人跡まれなる山中に咲いている桜をみる人もなく、そして生死をかけた修行をしているわたしを知る人もいない。わたしもひとり、花もひとり、そこに花と人との一期一会(いちごいちえ)でもいうべき出会いがあった。ところで、この湯殿の桜は降りつもる雪の下に埋もれていたが、春を忘れず咲き出そうとしている。芭蕉は、そうしたいじらしい生命(いのち)のまことにふれたとき、わりなしという言葉を用いる。(5) この遅桜の花のいじらしい生命にふれ、さらに、王朝の歌人の歌に思いをはせて、一層深く造化のありがたさに心打たれたのであろう。

(注) 炎天の梅花——「炎天下に咲く梅花」のことで、実際にはあり得ないが、心の中で作り出したもの。

行尊僧正——平安時代の歌人。

「金葉和歌集」——平安時代の歌集。

B 岩に腰をおろしてしばらく休んでいるうち、ふと三尺ばかりの桜の木の、蕾を半ばほころばしているのがあるのに気がついた。

降りつもる雪の下に埋もれながら、こうして花咲く春を忘れずにいる遅桜の花の心には、何ともやむにやまれぬものがある。さながら禪家にいう炎天の梅花がまのあたりに薫っているかのようだ。大峰で思いがけず桜の咲いているのを見て「もろともにあはれと思へ山桜」とよんだ行尊僧正の歌の趣もここに思い出されて、いっそう感銘深く思われた。

(頴原退蔵、尾形 仝 「新訂おくのほそ道」による)

〔問1〕 (1) 月山から湯殿にの「に」と同じ意味・用法のものを、次の各文の——をつけた「に」のうちから選べ。

ア 校庭の木々の葉が静かに散る。

イ 山のみもとに果樹園が広がる。

ウ 見るからに新鮮な野菜を食べる。

エ 柱時計が正確に時を刻み続ける。

〔問2〕 (2) 爰にかをるがごとし。とあるが、「爰にかをるがごとし」の意味に相当する部分を、Bの文章中からそのまま抜き出して書け。

〔問3〕 (3) 猶まさりて覚ゆ。とあるが、芭蕉には、何が「猶まさりて」思われたのか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 降り積もる雪の趣

イ 炎天の梅花の趣

ウ 行尊僧正の歌の趣

エ 遅桜の花の趣

〔問4〕 (4) もろともにあはれと思へ山桜花よりほかにしる人もなしとあるが、この歌をよんだ行尊僧正の気持ちの説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 桜の名所として名高い山の中を歩き回り、いろいろな種類の山桜を見つけて満足を覚えている。

イ 早春の山の中で厳しい修行に励みながらも、山桜の花を心の内に思い描いて安らぎを覚えている。

ウ 深い山の中で思いもかけず山桜の花に出会い、自分と同じよ

うに孤独な姿を見て共感を覚えている。

エ 山の中の見事な桜の前に、いっしょに来られなかった人に感動を伝えられなくて悔しさを覚えている。

〔問5〕 (5) この遅桜の花のいじらしい生命にふれ、とあるが、ここでいう「いじらしい生命」とは、「遅桜の花」のどのような様子を述べているのか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 山中にただよう梅の花の香りにも圧倒されずに、一層華やかに咲きこぼれている様子。

イ 王朝の歌人以来よみ継がれ、歳月を隔てて今もなお変わらずに咲き誇っている様子。

ウ 人の行き交う道のかたわらで、目を楽しませるかのように懸命に咲き続けている様子。

エ 降り積もった雪に埋もれながらも、春を忘れずに精いっぱい咲こうとしている様子。

平成9年度
解答用紙

国語

得点	
----	--

受検番号	
------	--

5	(問1)	
	(問2)	
	(問3)	
	(問4)	
	(問5)	

4	(問1)		(問2)		(問3)		(問4)	
	(問5)							

3	(問1)		(問2)		(問3)		(問4)		(問5)	
---	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--

2	(1) シタしい	しい	(2) クバる	る	(3) セイケツ		(4) タンシユク		(5) エンソウ	
---	----------	----	---------	---	----------	--	-----------	--	----------	--

1	(1) 装飾		(2) 穏やかな	やかな	(3) 勤められて	められて	(4) 深谷		(5) 根拠	
---	--------	--	----------	-----	-----------	------	--------	--	--------	--

1 (計10点)		2 (計10点)		3 (計25点)		4 (計30点)		5 (計25点)		
(1) 2点	(2) 2点	(3) 2点	(4) 2点	(5) 2点	問1 5点	問2 5点	問3 5点	問4 5点	問5 5点	
(2) 2点	(3) 2点	(4) 2点	(5) 2点	問1 5点	問2 5点	問3 5点	問4 5点	問5 5点		
(3) 2点	(4) 2点	(5) 2点	問1 5点	問2 5点	問3 5点	問4 5点	問5 10点	問1 5点	問2 5点	問3 5点
(4) 2点	(5) 2点	問1 5点	問2 5点	問3 5点	問4 5点	問5 5点	問1 5点	問2 5点	問3 5点	問4 5点
(5) 2点	問1 5点	問2 5点	問3 5点	問4 5点	問5 5点	問1 5点	問2 5点	問3 5点	問4 5点	問5 5点

国語

解答

- ① (1) そうしょく (2) おだ (3) すす
 (4) けいこく (5) こんきよ
- ② (1) 親 (2) 配 (3) 清潔 (4) 短縮
 (5) 演奏
- ③ [問1] ア [問2] ウ
 [問3] ア [問4] ウ
 [問5] イ
- ④ [問1] イ [問2] イ
 [問3] ア [問4] エ
 [問5] (省略)
- ⑤ [問1] イ
 [問2] まのあたりに薫っているかのよう
 だ
 [問3] エ [問4] ウ
 [問5] エ

① [漢字の読み]

(1)「装」の訓読みは「よそお(う)」,「飾」の訓読みは「かざ(る)」。(2)音読みは「平穩」の「オン」。(3)音読みは「勸告」の「カン」。(4)たにまのこと。(5)もとになる理由のこと。

② [漢字の書き取り]

(1)音読みは「親交」の「シン」。(2)音読みは「配布」の「ハイ」。(3)よごれがなくきれいなこと。(4)みじかくちぢめること。(5)「奏」の訓読みは「かな(でる)」。

③ [小説の読解] 出典;安西水丸「黄色い双眼鏡」。

[問1] <心情の理解> 「ぼく」が老人の話に興味をもったことは、あとの段落の「おしえてくれた魚の餌を作ってみよう」からも想像できる。そんな「ぼく」が「そうすると釣れますか?」と問いかけたので、老人は「そりゃ、入れ喰いさ」と自慢げに答えたのである。

[問2] <心情の理解> 同段落の「急に心細さがこみ上げた」や「自分の町がずっと遠くの方へ去ってしまうようにおもえた」からわかるように、辺りも暗くなり、自分の町からますます遠ざかっていくので、「ぼく」はだんだん不安になってきているのである。しかし黙ってリヤカーを引き続ける老人には、帰るとは言いにくい。言いたいことは言えないし、どんどん自分の町から遠ざかるので不安は大きくなるばかりであろう。「ぼく」はこうした状況にあせりを感じているのである。

[問3] <心情の理解> 「ぼく」の不安は、帰り道がどんどん遠く、暗くなることからくる不安である。それがやっと帰れるようになったのに呼び止められ、「ぼく」はまた帰れないのではなにかと思ったのである。

[問4] <表現の理解> 辺りも暗くなり、自分の町から遠いところまで来てしまったので、「ぼく」はとにかく帰りたかったのである。「風の音だけが闇のなかで鳴った」や「運動靴の音がぼくを追いかけた」という表現は、人気のない暗い道を、不安な思いで家路を急ぐ「ぼく」の孤独な心情を表しているといえよう。

[問5] <心情の理解> 直前の段落に「町の灯りが見えた。臉が熱くなった」とあることからわかるように、「ぼく」は自分の町の近くに帰ってきてほっとしたのである。やっと自分の町が見える所まで来たうれしさから、「ぼく」は自分の町をもらった双眼鏡で見てみようとしたのである。「濡れて見えた」は「臉が熱くなった」に呼応する表現である。

④ [論説文の読解] 出典; 田中茂「温暖化対策へ英知結集」。

<本文の概要> 地球の温暖化問題は、地球環境における最重要問題であるが、その原因の総合的かつ科学的な原因究明は十分になされていない。二酸化炭素は温暖化の大きな原因ではあるが、それだけではない。さまざまな要因が複雑に関係して温暖化が進んでいるのである。地球環境の問題は人間社会のうえに成り立つものであるから、科学的な観点からだけではなく、社会科学も含めた総合科学的な観点から、地球の温暖化の問題をとらえていくべきだろう。

[問1] <文章内容の理解> 第五段に「地球の温暖化はさまざまな要因が複雑に関係しており～二酸化炭素の対策だけで地球の温暖化問題が解決されると考えるのは早計である」とある。二酸化炭素以外にも温暖化の原因が考えられる以上、二酸化炭素による影響をクローズアップするのはおかしい、と筆者は考えている。

[問2] <文章内容の理解> 第六段にあるように、科学技術は「個別の限られた領域においては大きな成果を得ることができた」もの、つまりその一つ一つが「単一の系」の中ではたらくものなのである。一方地球環境は、「実際にはあまりにも複雑な系」である。「複雑な系」である地球環境の実態は、「単一の系」ではとらえられないのである。それは、複数の原因がからみ合っ

生じた問題が単一の原因の除去では解決できないことと同様である。だからこそ、「制御できる」という考え方には注意が必要なのである。

〔問3〕<段落関係の把握>第六段では、科学技術が「単一の系」で機能するのに対し地球環境が「複雑な系」であること、したがって「社会科学の分野も含めた総合科学的な観点」から温暖化の問題をとらえるべきことが述べられている。第七段では、「総合科学的な観点」から温暖化の問題をとらえるためには、各分野の枠を超えた学際的研究とそのための人材養成の二つが必要であることが述べられている。

〔問4〕<要旨の把握>ア. 第二段に二酸化炭素は「温暖化の大きな要因」とあるし、第三段には「海洋・森林等による二酸化炭素の回収・固定能力は未知数」とある。イ. 第四段に「大規模な火山噴火とその後の気温の低下」とある。ウ. 第八段に「地球環境問題は人間社会の上に成り立つものであって、その将来の動向を科学的観点のみから予測するのは困難」とある。

〔問5〕<作文>主述の関係や誤字・脱字にも注意し、わかりやすい表現で書くこと。

⑤〔古文の読解〕出典：松尾芭蕉『おくのほそ道』。

〔問1〕<品詞の識別>この「に」は、帰着点を表す格助詞。アとエは形容動詞の連用形活用語尾。ウは副詞の一部。

〔問2〕<現代語訳>「かをる」は、匂いが漂うこと。「ごとし」は、「～のようだ」という意味でたとえを表す。

〔問3〕<古文の内容理解>芭蕉は「春を忘れぬ遅桜の花」を見て、行尊僧正の歌を思い出している。そしてその歌の趣を思い出して「いっそう感銘深く思われた」といっているのだから、この感銘の対象は「遅桜の花の心」である。

〔問4〕<和歌の鑑賞>「もろともに」は、一緒にそろってという意味。前後の鑑賞文からわかるように、行尊は山にこもり一人で修行をしているときに、人知れず咲いている山桜に気づきこの歌を詠んだのである。山桜も自分もともに一人であるという境遇からくる共感が、この歌の感動の中心になっている。

〔問5〕<古文の内容理解>「遅桜の花」は、雪の下に埋もれながらも咲き出そうとしている。一つの小さい生命でありながら、周囲に屈することなく、力強く生きようとしている。こうした花の趣を、芭蕉は「わりなし」と表現したのである。